

## 【京都府公立中学校長会会長賞】

### 「糸数壕」

向日市立西ノ岡中学校 3年 中川 嬉乃

「もし自分だったらって想像してみて」、そう言ったガイドさんの声は震えていて暗いガマの中で泣いておられるのが分かった。

糸数壕は沖縄戦の様子を今でも伝える大切な場所だ。この場所は別名アブチラガマという。「アブ」とは深い縦の洞窟、「チラ」とは崖のこと、「ガマ」とは沖縄の方言で洞窟という意味がある。

ガマに入ってみると、まずとても暗くてびっくりした。心の中で本当にここで人が何人も暮らしていたのかと疑ってしまうくらいだった。暗いガマの中でガイドさんはたくさんの事を教えてくださいました。その中でも印象に残っている話が2つある。1つ目は、このガマでお国ために働いていた私達と同じ年くらいの女子生徒の話。そう、ひめゆり学徒隊の話だ。

彼女達には麻酔無しの手術を行う時、痛さで暴れる兵隊さんを押さえしておく仕事やガマの中で出た排泄物や手術で切り落とした手や足を外に運んで捨てにいくという仕事があった。手や足なんかはとても重くて片手では持てなかったそうだ。

2つ目は、もう治らないと判断された兵士たちがいた場所についての話だ。

その場所はとても広く、そこに何十人もの治らないと判断された兵士がいたそうだ。

手術してもらえず、ご飯の配給もなく、ただただ暗いところで家族のことを思い浮かべながら死ぬ時が来るのを待っていた。その中には苦しくて叫ぶ人もいて、まるで地獄のような場所だった。

ガイドさんはひととお話を終えると、「それでは当時のガマの暗さを体験してもらうために懐中電灯の明かりを消してみてください」といわれた。みんなが明かりを一斉に消し、真っ暗になると、ガイドさんはこう続けられた。「もし、自分だったらって想像してみて、君達と同じ年くらいの子だったんだよ、この暗闇の中で家族のことを思いながら亡くなっていったんだよ」と。

私は、暗闇の中で想像してみた。もしとても痛いのに手術してくれなかったら、もし死ぬ瞬間に家族に会えなかったら、もしこの暗闇の中で死が来るのを待たなければならなくなったら、もし隣で友達が死んでいったら...と。恐ろしくて、恐ろしくてたまらなくなった。そういう体験をした人達がいたのだと思うと涙が出てきた。

そこで初めて自分は平和や命の大切さについて座学だけで知ったつもりになっていたけど、全然理解できていなかったことに気が付いた。そして、今回の体験を通して命の大切さや平和の大切さに触れることができたような気がした。

今では平和な日常が送れるようになっている日本ですが、その周りでは平和を脅かすような出来事がたくさん起こっている。さらに視野を広げて世界を見ても、どこの国も自分の国の事だけを考えていて、いつ戦争が起きてもおかしくない状況だと思う。

そんな平和が脅かされている今、私達ができることは、友達と楽しくおしゃべりができたり、おいしいご飯が食べられる、当り前の生活が当たり前でなかった時代があったことを理解することだ。そして、次に、当り前の生活ができることに感謝し、思いやりの心を持って生活していくことだ。そして、最後に、ガマの中でガイドさんが教えてくださいましたことを大切に、「もう戦争は起こしてはいけないのだ」、ということを後世に伝えていくことだ。

私は、この3つのことをやっていこうと思う。もう二度と戦争が起こらない平和な世界になることを願って。